

神戸市長田区

若松町遺跡

2000. 3

神戸市教育委員会

神戸市長田区

ワカ マツ チョウ イ セキ
若松町遺跡

2000. 3

神戸市教育委員会

序

平成7年1月17日未明におきた兵庫県南部地震は、神戸市にも甚大なる被害を与えました。多くの大切な生命を奪うとともに、地震による家屋の倒壊、火災による家屋の焼失という過去に例のないほどの大惨事となりました。文化財においても、倒壊や、焼失など貴重な国民の財産に大きな被害がおきました。神戸市では、復旧・復興事業を円滑に進めるとともに将来の文化的な発展にも目を向けていかなければならないと考えており、被災した文化財の保護もその一つであるといえましょう。

本書で報告する若松町遺跡の位置する長田区若松町も、神戸市内でも最も大きな被害を受けた地区の一つです。発掘調査は、当地区において震災復興にともなう共同住宅の建設に先立ち、行われたものです。調査の結果、今までに遺跡のあることが知られていなかった当地に遺跡のあることがわかるとともに、神戸市内では最も古い、弥生時代から古墳時代にかけての畠の跡も見つかり、貴重な資料となりました。

これらの成果をまとめた本書が、復興の足跡の記録として、また学術研究、教育・普及の資料として広く活用され、復興事業・埋蔵文化財保護へのご理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただいた兵庫県教育委員会、同埋蔵文化財調査事務所、ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成12年3月31日

神戸市教育委員会

教育長 鞍 本 昌 男

例　　言

1. 本書は、神戸市長田区若松町11丁目に所在する若松町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、阪神・淡路大震災の復興事業に伴う事前調査であり、神戸市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、試掘調査を平成10年3月26日に、全面調査を平成10年5月11日から7月10日まで実施した。試掘調査は神戸市教育委員会 学芸員 阿部 功が、全面調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班 山田清朝・高木芳史が担当した。
4. 発掘調査時の造構写真の撮影については調査員が実施したが、全景写真的撮影については株式会社ジオテクノ関西に委託した。
5. 造構の基準点測量については、株式会社ジオテクノ関西に委託し、造構の実測は調査員および調査補助員が実施した。
6. 調査にあたっては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター 工楽普通センター長、立命館大学文学部 高橋 学教授には、現地にて調査方法等についての御指導をいただいた。
7. 岬土壤内の花粉化石、プラント・オバール化石、大型植物遺体の分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 整理作業および本書の作製は、調査終了後、山田と高木が実施した。
9. 第4章を除く本書の執筆は、山田と高木が行い、山田が編集した。
10. 本書で使用した標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とする。また、方位は座標北を示す。
11. 本書に掲載した資料は、神戸市教育委員会が管理・保管している。
12. 本報告書の作製にあたっては、伴 悅子の協力を得た。

目 次

第1章 若松町遺跡 ······ (山田) 1	第4章 若松町遺跡の自然科学分析 ······ 35
第1節 はじめ ······ 1	第1節 はじめに (新山雅広・鈴木 茂) ··· 35
第2節 地理的環境 ······ 1	第2節 若松町遺跡の花粉化石群集 (新山) ··· 37
第3節 歴史的環境 ······ 7	第3節 プラント・オパール (鈴木) ··· 40
第2章 調査の経緯 ······ (山田) 10	第4節 若松町遺跡の大型植物化石 (新山) ··· 43
第1節 調査に至る経緯 ······ 10	第5章 まとめ ······ (山田) 45
第2節 調査の方法 ······ 10	第1節 島について ······ 45
第3章 調査の成果 ······ 13	第2節 地形環境の変化と土地利用 ······ 49
第1節 基本層序 ······ (山田) 13	
第2節 調査の結果 ······ (高木) 17	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	第20図 第3層出土土器 ······ 15
第2図 六甲山南麓 ······ 1	第21図 第1面 弥生時代の遺構 ······ 16
第3図 若松町遺跡の立地 ······ 2	第22図 第1面全景 ······ 17
第4図 若松町遺跡と六甲山地 ······ 3	第23図 岌全景 (東から) ······ 18
第5図 都市化以前の若松町遺跡周辺 ······ 3	第24図 岌全景 (南から) ······ 18
第6図 若松町遺跡周辺の微地形 ······ 4	第25図 岌1の検出 ······ 19
第7図 大国公園 ······ 5	第26図 岌1の位置 ······ 19
第8図 二子池跡記念碑 ······ 5	第27図 岌1 ······ 19
第9図 周辺主要遺跡 ······ 6	第28図 岌1全景 ······ 20
第10図 調査前 ······ 10	第29図 試溝断面 ······ 20
第11図 機械掘削 ······ 10	第30図 岌2の位置 ······ 21
第12図 現地説明会 ······ 10	第31図 岌2 ······ 21
第13図 土層断面図 ······ 12	第32図 岌2全景 ······ 22
第14図 基本層序 ······ 13	第33図 岌2の検出 ······ 22
第15図 第1面土器出土状況 ······ 13	第34図 岌2 試溝底部 ······ 22
第16図 第1面出土土器 ······ 13	第35図 岌2 試溝 ······ 23
第17図 第10層出土土器 ······ 14	第36図 岌2 鋸痕 ······ 23
第18図 第10層土器出土状況 ······ 14	第37図 岌3の位置 ······ 24
第19図 第8層出土土器 ······ 15	第38図 岌3 (南から) ······ 24

第39図 岌 3	25	第52図 S D03出土土器	30
第40図 岌 4 の位置	26	第53図 第 1 面 平安時代の遺構	31
第41図 岌 4	26	第54図 第 3 面全景（西から）	32
第42図 岌 4 全景（西から）	26	第55図 S D04	32
第43図 第 1 面 古墳時代の遺構	27	第56図 第 3 面	33
第44図 岌 5 出土土器	28	第57図 S B01	34
第45図 岌 5 全景	28	第58図 分析試料採取位置平面図	36
第46図 岌 5	28	第59図 産出した花粉化石	39
第47図 岌 5 の検出	28	第60図 プラント・オパール分布図	41
第48図 岌 5 鋤痕	28	第61図 若松町遺跡のプラント・オパール	42
第49図 P 1 出土土器	28	第62図 出土した大型植物化石	44
第50図 第 1 面 奈良時代の遺構	29	第63図 第 1 面微地形の復原	46
第51図 S D03	30	第64図 鋤痕の規模	47

表 目 次

第 1 表 分析試料一覧表	35	第 4 表 岌一覧表	47
第 2 表 花粉化石一覧表	38	第 5 表 地形環境の変化と土地利用	49
第 3 表 試料 1 g 当たりの プラント・オパール個数	40		



第1図 遺跡の位置

第1章 若松町遺跡

第1節 はじめに

今回報告する若松町遺跡は、以前は全く周知されていなかった遺跡である。後述するように、震災復興にともなう共同ビルの建設に先立つ試掘調査により、遺跡の存在があきらかとなったものである。

第2節 地理的環境

地理的位置

神戸市は、兵庫県の南東部に位置し（第1図）、兵庫県の政治・経済等の中心をなしている。当市は、政令指定都市であり、西区・北区・垂水区・須磨区・長田区・兵庫区・中央区・灘区・東灘区の9区からなる（第1図）。若松町遺跡は長田区に所在する。長田区は、神戸市域南部に位置し、行政区的には、西側を須磨区、東側を兵庫区、北側を北区とそれぞれ接している。

地形的位置

神戸市域の南東部には南西から北東にのびる六甲山地があり、これが、神戸市内の地理的環境に大きな影響を及ぼしている。このため、神戸市域を六甲山地の南側と北側およびその西側の大きく3地域に分けることができる。

北側

六甲山地の北側に広がる三田盆地を中心とした地域である。ただし、平地は少なく、丘陵地と有野川・八多川等によって形成された開析谷からなる。面積的には、神戸市域



第2図 六甲山南麓

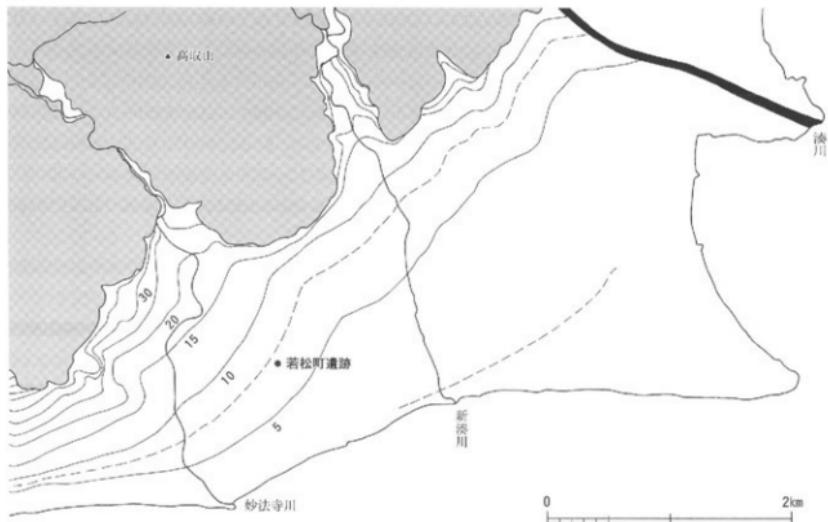
の半分以上を占める。旧国の大津にあたり、その北部に位置することから、三田市とともに「北摂地方」とも言われている。

当地域での主産業は農業であった。ところが近年、丘陵を対象とした北神ニュータウンを中心とした宅地開発が著しく、神戸・大阪のベッドタウン化が近年著しい。北区と西区・須磨区の一部が該当する。

西側 明石川及びその支流をなす伊川・榎谷川によって形成された開析谷および段丘面・丘陵からなる地域である。律令時代には主に播磨国に属していた地域である。北側同様、平野部を中心に農業が主産業であった。近年は、丘陵部を中心に須磨ニュータウン・学園都市・西神ニュータウンなどに代表されるように宅地開発が顕著である。垂水区と西区及び須磨区の一部が該当する。

南側 一般に「六甲南麓」と言われる地域で、大阪湾と六甲山系に挟まれた南西から北東にのびる狭長な地域である（第2図）。旧国の大津にあたり、その西部に位置することから、「西摂地方」とも言われている。

六甲山地から大阪湾に注ぐいくつかの河川によって形成された扇状地が東西に連続する傾斜地からなる。西から、妙法寺川・湊川・都賀川・住吉川・芦屋川などがおもな河川である。須磨区から東灘区にかけての6区が該当する。神戸市の政治・経済等の中心をなす地域で、市街化が顕著である。当地域に神戸市の人口の約47%が集中している（平成11年7月現在）。



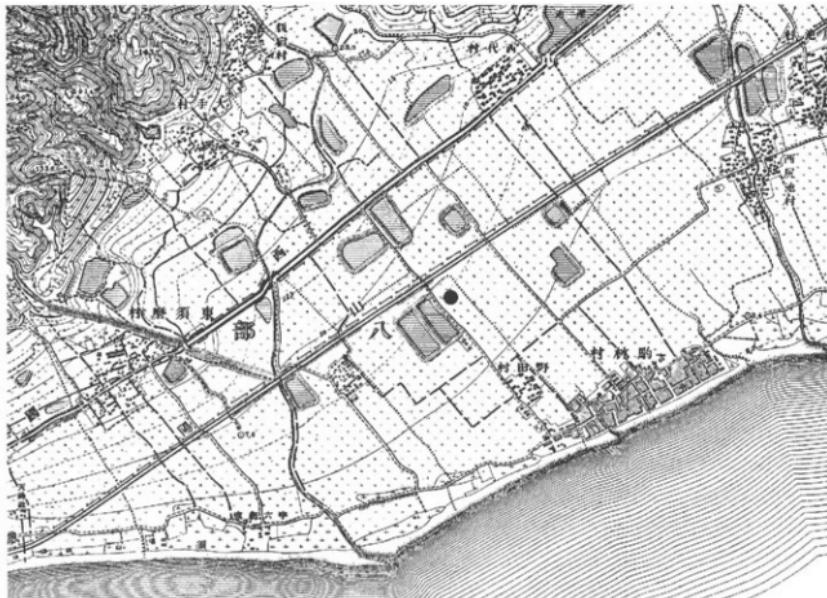
第3図 若松町遺跡の立地



第4図 若松町遺跡と六甲山地

若松町遺跡

若松町遺跡もこの地域に位置する。六甲南麓地域の西部にあたり、連続する扇状地群のなかで最も西側の扇状地に立地する（第3図）。この扇状地は、妙法寺川によって形成されたものである。若松町遺跡は、当扇状地の扇端部に近く、現地表面における標高は7.5mを測る。



第5図 都市化以前の若松町遺跡周辺

なお、若松町遺跡の南側、つまり海側の海岸沿いに旧駒林村（現長田区駒林町）が所在する（第5図）。このあたりは砂堆上に立地する。したがって、当遺跡は、初期の段階、つまり第2面・第4面で検出した水田土壤層が形成された時期においては、山側の扇状地と海側の砂堆に挟まれた後背湿地に立地していた可能性が考えられる。

復原される海岸線からの距離は0.6kmである（第5図）。

微地形の復原

当地は、市街地化が顕著で、より微視的な地形環境の復原は困難である。ただし、神戸市発行の1/2500都市計画図をもとに復原した微地形（第6図）をみると、当遺跡が北西から南東方向に張り出す微高地上に立地していることがわかる。南西—北東方向で約200mを測る。この微高地が扇状地形成時の一単位（lob）を表す可能性が高い。



第6図 若松町遺跡周辺の微地形



第7図 大国公園

大国公園

なお、若松町遺跡の北西側約200mに「大国公園」(第7図)があり、当公園内に「二子池跡記念碑」と刻まれた石碑(第8図)が建立されている。そして、この石碑の台座には「大国公園の由来」が記されている。要約すると、「当地は旧野田村村有の二子池であったが、大正末期に池を埋め立て、鎌誠神社の御旅所として使用されるようになった。ところが、昭和42年にこの御旅所が火災にあったことから、これを売却することとなった。その後、当地は、昭和46年に公園として利用されるようになった。」というものである。

二子池

二子池は、第5図の当遺跡の西側に認められる二つの池と考えられる。第6図で復原した等高線を考慮に入れると、この池は、当遺跡の立地する微高地の南西側にある微凹地の痕跡ではないかと考えられる。

周辺の微地形

なお、若松町遺跡を含む周辺の微地形については、高橋学「戎町遺跡の地形環境—湊川・妙法寺川流域の地形環境I—I」(『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989)を参照されたい。



第8図 二子池跡記念碑



- | | | |
|-------------|-----------|-------------|
| 1. 若松町遺跡 | 7. 御萩遺跡 | 13. 太田町遺跡 |
| 2. 上沢遺跡 | 8. 神奈遺跡 | 14. 千歳遺跡 |
| 3. 室内遺跡 | 9. 刘墓遺跡 | 15. 反町遺跡 |
| 4. 五番町遺跡 | 10. 念仏山古墳 | 16. 長田野田遺跡 |
| 5. 長柄神社境内遺跡 | 11. 松野遺跡 | 17. 長田本庄村遺跡 |
| 6. 長柄南遺跡 | 12. 咲町遺跡 | 18. 惠取町遺跡 |

第9図 周辺主要遺跡

第3節 歴史的環境

はじめに

当節では、若松町遺跡が立地する、妙法寺川によって形成された扇状地上にある遺跡を中心見ていくことにしたい。また、時期的にも、当遺跡と関連する弥生時代～鎌倉時代前期に限定したい。

1. 若松町遺跡

今回報告する調査区の南西側に隣接する地区で、ほぼ平行して調査が行われている(第2次調査)。この調査においては、第1次調査と同様の畠、庄内式から布留式にかけての堅穴住居跡、平安時代後期の木棺墓等がみつかっている。

2. 周辺の遺跡

(1) 弥生時代

戎町遺跡⁽¹⁾・大田町遺跡⁽²⁾・長田神社境内遺跡⁽³⁾・松野遺跡⁽⁴⁾などが周知されている。

戎町遺跡(12) 10数次にわたって調査がなされており、前期から庄内期まで断続的に継続している。

前期 遺構としては、水田跡・土坑・旧河道等の遺構が検出されている。旧河道から多量の土器が出土したほか、石器、木製品等も出土している。

中期 堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・土器棺・落ち込み・ビットなどが検出されている。第Ⅲ様式を中心で、第Ⅱ様式・第Ⅳ様式の順に土器が出土している。

後期 柱穴・溝状遺構・土坑等が検出されている。

庄内期 土坑・落ち込み・ビットなどが検出されている。土器の出土量は多くはない。

大田町遺跡(13) 中期の遺構が検出されている。

前期 遺構は検出されていないが、完形の壺が8個体出土している。

中期 堅穴住居跡・土坑等が出土している。

神楽遺跡(8) 後期の溝・河道が検出されている。

長田神社境内遺跡 後期末から古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡・土器棺墓・土坑・柱穴・溝等が検出

(5) されている。

松野遺跡(11) 後期の土坑と井戸が検出されている。

(2) 古墳時代

松野遺跡・戎町遺跡・大田町遺跡・長田神社境内遺跡・神楽遺跡⁽⁵⁾・鷹取町遺跡⁽⁶⁾などが周知されている。

松野遺跡(11) 5世紀末の、総柱の掘立柱建物跡・概・溝等からなる居館跡が見つかっている。また、この居館の南側の地区においても、ほぼ同時期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・井戸状遺構などが見つかっている。

戎町遺跡(12) 前期から後期にかけての集落跡が明らかとなっている。

前期 布留式段階の柱穴・土坑等が検出されている。

後期 柱穴・土坑・溝状遺構・水田跡が検出されている。

- 大田町遺跡（13） 中期から後期にかけての遺構・遺物が見つかっている。
中期 第8次調査で、遺物包含層中から比較的多くの土器が出土している。
後期 柱穴・土坑などが検出されている。
- 神楽遺跡（8） 中期と後期の遺構が検出されている。
中期 5世紀後半から5世紀末にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑等が見つかっている。
後期 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑等が検出されている。
- 長田神社境内遺跡 前期から後期の遺構が検出されている。
前期 竪穴住居跡が検出されている。
中期 水田跡が検出されている。
後期 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑が検出されている。
- 鷹取町遺跡（18） 前期から後期の各時期の遺構が見つかっている。
前期 土器棺・土坑・柱穴群が見つかっている。
中期 掘立柱建物跡・水出跡が見つかっている。
後期 掘立柱建物跡・土坑・溝が見つかっている。
- （3）奈良時代
- 大田町遺跡・神楽遺跡・長田神社境内遺跡などが周知されている。
- 大田町遺跡（13） 数次にわたる調査が行われ、旧山陽道の「須磨駅」に関連する遺跡である可能性が高くなっている。掘立柱建物跡・竪穴状遺構が検出されている。この他、9世紀後半に埋没する古代山陽道に伴う側溝が検出されている。
- 神楽遺跡（8） 一辺1m規模の方形の柱穴が検出されている。時期的に、平安時代にかけてのものである。
- 長田神社境内遺跡 平安時代にかけての旧河道が検出されている。
- （4）中世
- 戎町遺跡・大田町遺跡・長田神社境内遺跡・神楽遺跡・松野遺跡・鷹取町遺跡などが周知されている。
- 戎町遺跡（12） 平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての、掘立柱建物跡・柱穴・井戸・溝等が検出されている。
- 大田町遺跡（13） 平安時代前半と後半の遺構が検出されているが、前半の遺構が当遺跡の中心的な位置をしめる。
前半 掘立柱建物跡・土坑・溝・地鎮遺構等が検出されている。
後半 12世紀頃の柱穴・溝が検出されている。
- 長田神社境内遺跡 平安時代末の木棺墓・溝・柱穴等が検出されている。
- 神楽遺跡（8） 平安時代中期（10世紀中葉～11世紀初頭）の溝が検出されている。溝内からは、須恵器・土師器をはじめとして、綠釉陶器・灰釉陶器なども出土している。
- 松野遺跡（11） 鎌倉時代の掘立柱建物跡・井戸が見つかっている。
- 鷹取町遺跡（18） 鎌倉時代の掘立柱建物跡・溝などが見つかっている。

[注]

- (1) 山本雅和『神戸市須磨区 戎町遺跡第1次調査概報』神戸市教育委員会 1989
須藤 宏「戎町遺跡 第10次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
口野博史「戎町遺跡 第14次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
前田佳久「戎町遺跡 第17次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
山本雅和「戎町遺跡 第19次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
前田佳久「戎町遺跡 第20次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
山本雅和「戎町遺跡 第21次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- (2) 森内秀造・山上雅弘「大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1993
口野博史・川上厚志「大田町遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
秦 薫二・補宜田佳男「大田町遺跡 第6次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会 1998
山口英正・東 喜代秀「大田町遺跡 第5次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会 1997
池田 穀「大田町遺跡 第6次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会 1998
- (3) 背本宏明「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981
背本宏明「神楽遺跡」「昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1986
渡辺伸行・西岡誠司「神楽遺跡」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987
前田佳久・川上厚志「神楽遺跡 第7次調査」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会 1994
- (4) 黒田恭正「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990
西岡巧次・西岡誠司「長田神社境内遺跡 第5次調査」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会 1994
西岡誠司他「長田神社境内遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
- (5) 千種 浩「松野遺跡 発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983
神戸市教育委員会「松野遺跡—第4次調査— 現地説明会資料」1997
- (6) 大平 茂「鷹取町遺跡」兵庫県文化財調査報告書 第89冊 兵庫県教育委員会 1991

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

はじめに

第1節でも述べたように、若松町遺跡は、以前は周知されていなかった遺跡である。震災復興とともに共同ビルの建設に先立つ試掘調査により埋蔵文化財の包蔵が新たに確認された遺跡である。この結果、今回の全面調査を実施することとなったものである。

第2節 調査の方法

試掘調査

平成10年3月26日に、調査対象地内に4箇所にグリッドを設定し、埋蔵文化財の包蔵の有無の確認を行った。

全面調査

平成10年5月11日から7月10日にかけて実施した。調査は、最終的に、上から第1面から第4面の4面にわたって行った。第1面の直上までは重機により掘削し、以下を人力により掘削していった。

現地説明会

なお、調査は約1380m²を対象としたが、対象地内にあった既存の建物の撤去が一部遅れたため、当初は2地区にわけて行った。ただし、既存の建物の撤去が予定より早く完了したため、第3面と第4面の調査は一括して行った。

また、第1面の調査が終了した6月6日には、一般市民を対象とした現地説明会を開催した(第12図)。



第10図 調査前



第11図 機械掘削



第12図 現地説明会

調査体制

全面調査に伴う調査体制は以下の通りである。

全面調査

神戸市文化財保護審議会委員（埋蔵文化財部会）

榎上重光 前神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

工柴普通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

神戸市教育委員会

教育長 梶本昌男

社会教育部長 矢野栄一郎

文化財課長 大勝俊一

社会教育部主幹 奥田普通

埋蔵文化財係長 渡辺伸行

事務担当学芸員 東 喜代秀

調査担当者

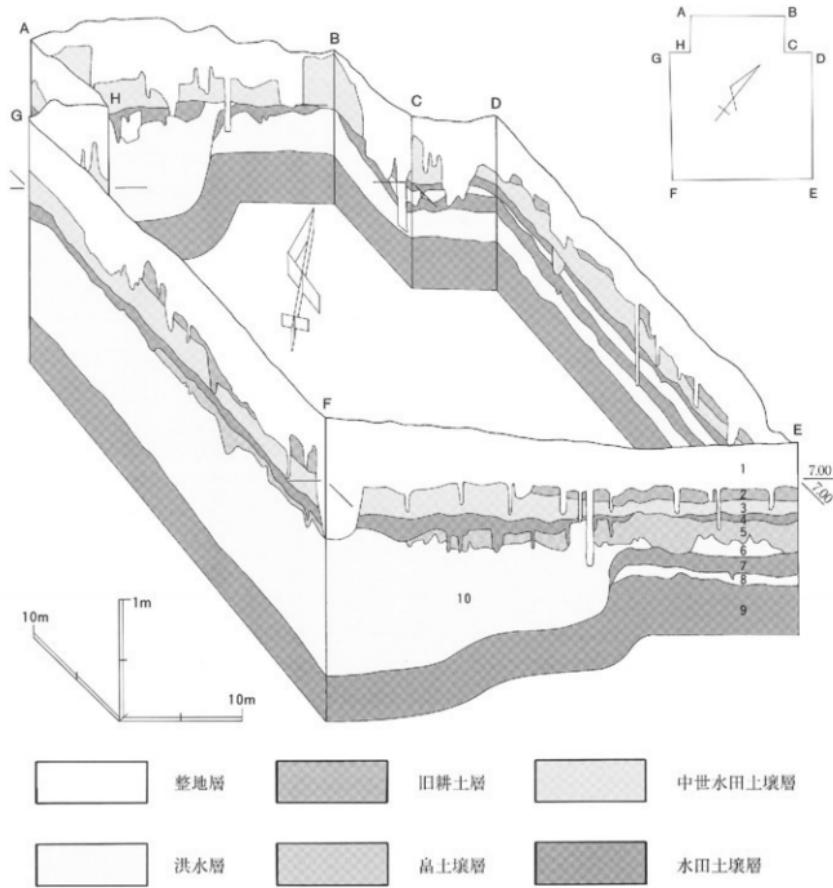
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

主査 山田清朝

研修員 高木芳史

調査補助員

山本陽子・山川かおり・中塚克浩



- | | | |
|----------------|--------------------|------------------|
| 1. 盛上 | 5. 灰黄色 シルト質極細砂～中砂 | 9. 暗黒褐色 粗砂～小砾混じり |
| 2. 旧耕土 | 6. 灰褐色 シルト混じり細砂～中砂 | シルト |
| 3. 黄灰色 細砂～粗砂 | 7. 暗黒褐色 細砂混じりシルト | 10. 灰黄褐色 シルト～小砾 |
| 4. 黑褐色 シルト質極細砂 | 8. 灰黄褐色 シルト～粗砂 | |

第13図 土層断面図

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

(1) 基本層序と遺構の検出

調査は、先述したように、第1面から第4面の4面にわけて遺構の検出に努めた。以下、各遺構検出面と基本層序との関係(第14図)について、まとめておきたい。

第1面

第4層直下、つまり第5層上面で検出した。ただし、第5層が全域で認められなかたため、第4層を除去した面を、第1面とした。このため、第5層・第6層・第10層が第1面の基盤層となる。

第3層を埋土とする遺構(溝状遺構)と

第4層を埋土とする遺構(畠・柱穴)を検出している。

第5層

第5層は畠土壤である。つまり、下層の第6層・第10層とともに洪水に起因して堆積し、畠作に伴い土壤化した層が第5層と考えている。

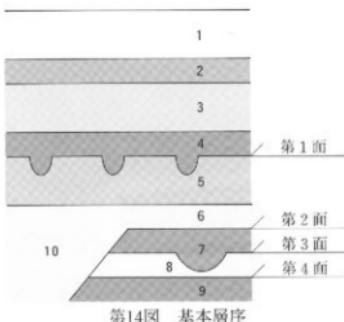
第4層

第4層は、黒褐色シルト質極細砂からなる湿地性の堆積層で、畠土壤を覆う潜水に伴い形成されたものと考えられる。ただし、当層は調査地区全域に認められるものではなく、特に調査区北側を中心認められない箇所が存在した。このため、調査区北西部で認められた第4層と南東部の第4層とでは、その形成時期が異なる可能性が考えられる。実際に、調査区北側で検出した畠5の歎溝は第4層を切り込んでいる。なお当層は、その層相から判断して、水田土壤層と考えられる。

また、第4層上面において検出が可能な遺構も認められたが、①第4層自体が部分的に、特に北側において認められない箇所が存在すること、②第4層が認められる箇所においても、全体的に厚さ10cm以下と薄い層であること、等の理由から、これらの遺構についても第4層下面、つまり第1面において検出した。

時期

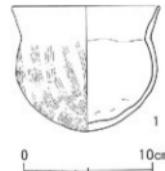
第4層が認められない箇所で、第6・10層の上面に部分的ではあるが洪水砂の堆積が認



第14図 基本層序



第15図 第1面土器出土状況



第16図 第1面出土土器

められる。この洪水砂上面から1の小型丸底壺が出土している(第15図・第16図)。頭部外面にわずかにタタキの痕跡が認められる点、体部外面がハケ調整により仕上げられている点、体部に対して口縁部があまり発達していない点から判断して、小型丸底壺の初現形態と考えられる。このため、弥生時代後期後半～古墳時代初頭以前に位置付けられる。

よって、弥生時代後期後半を中心とした時期と考えられる。

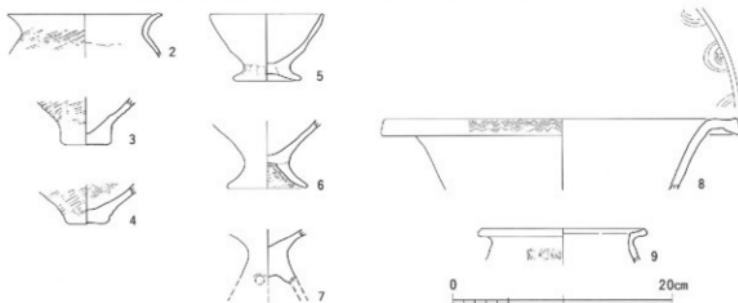
第2面

第6層・第10層を除去して検出した面である。第7層は、水田土壤層の可能性が高い暗黒褐色細砂混じりシルトであり、当面が水田面に相当する可能性が極めて高い。

なお、当面は、調査区の南西半分を第10層堆積に起因する洪水により抉られている。

時期

当面を覆う第10層から出土した土器と、その下層の第7層と同時堆積と考えられる第8層から出土した土器から、弥生時代後期と考えられる。



第17図 第10層出土土器

第10層出土土器 当遺跡の中では比較的多く出土している(第17図)。図化できたのは2～9の8個体である。8個体の土器は、弥生時代中期と後期の2時期のものが出土している。

中期 8と9の2個体である。8は広口壺の口縁部で、口径31.8cmと比較的大型である。口縁端部および口縁部内面をユビおさえにより、他をナデ調整により仕上げている。口縁端部内面には扇状紋が、外端面には柳描波状紋が施されている。9は壺の口縁部で、口径14.8cmを測る。体部外面をハケ調整により、他をナデ調整により仕上げられている。

後期 2～7の6個体である。2は口径13.9cmを測る。体部外面を叩き整形後、口縁部をナデ調整により仕上げている。2～4はV様式系の壺である。3は突出した平底であるが、4はわずかに丸底化の傾向が認められる。

3・4の底径はそれぞれ4.4cm、3.7cmである。

5は鉢で、完形に近い形で出土している(第18図)。口径10.2cm、脚径5.6cm、器高6.1cmを測る。内外面ともナデ調整により仕上げられている。6も鉢の可能性が高い。体部内外面はヘラナデないしはヘラミガキにより仕上げられている。脚部内面はハケ調整により、外



第18図 第10層土器出土状況

面はナデ調整により仕上げられている。脚径7.0cm。7は、高坏の脚部である。

以上のように、中期と後期の土器が出土しているが、①量的には後期の上器が多いこと、②中期の土器については洪水時に中期の包含層等を抉った結果と考えられることから、第10層は後期の堆積と考えられる。ただし、より細かな時期の特定は困難である。



第19図 第8層出土土器

第8層出土土器 第8層からは若干の上器片が出土しており、その中で図化できたのが10の1個体である（第19図）。10は弥生時代後期の特徴を示す壺で、体部内面はナデ調整により仕上げられている。口径は11.4cm。

第3面

第2面の基盤層となった第7層を除去して検出した面である。当遺構面の基盤層となる第8層とその上層にあたる第7層は本来は同時堆積によるところから、当面で検出した遺構は、第7層上面から切り込んでいるものと考えられる。しかし、第7層自体が土壤層であることから遺構の検出は困難で、土壤化の及んでいない当面で検出したものである。

なお、当面も、調査区の南西半分は第10層堆積の際の洪水により抉られ、存在しない。

第4面

第8層を除去して検出した面で、第9層の上面にあたる。第9層は、湿地性の堆積に起因する層である。調査で確認できた最も下の層である。このため、調査区全域にわたる当層の厚みの確認は出来なかったが、一部では1m以上におよぶ箇所を確認している。当層を詳しく観察すると、第9層の上層約15cmで人為的と考えられる擾乱が認められ、暗黒褐色粗砂～細砂泥じりシルトからなる土壤層となっている。この土壤層は、その層相から水田土壤の可能性が考えられる。つまり、当面が水田面と考えられる。

なお、当面の南西半分についても、第10層堆積の起因となる洪水により抉られている。

時期

上層となる第8層から出土した土器（10）から判断して、弥生時代後期以前と考えられるが、大きく遡るのではなく、後期の範囲で理解できるのではないかと考えられる。

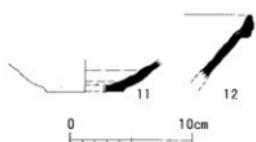
（2）その他

第3層

最後に、第1面より上層の第3層について説明しておく。基本的には調査区全域で認められた。洪水により堆積した層を水田土壤化したもので、極細砂～粗砂からなる。数層の床土層が一定の間隔で認められ、黄灰色となっている。

出土土器

当層からは須恵器と上器が出土している。量的に比較的多く出土しているが、小片のものが多く、図化できたのは11と12の須恵器に限られる（第20図）。



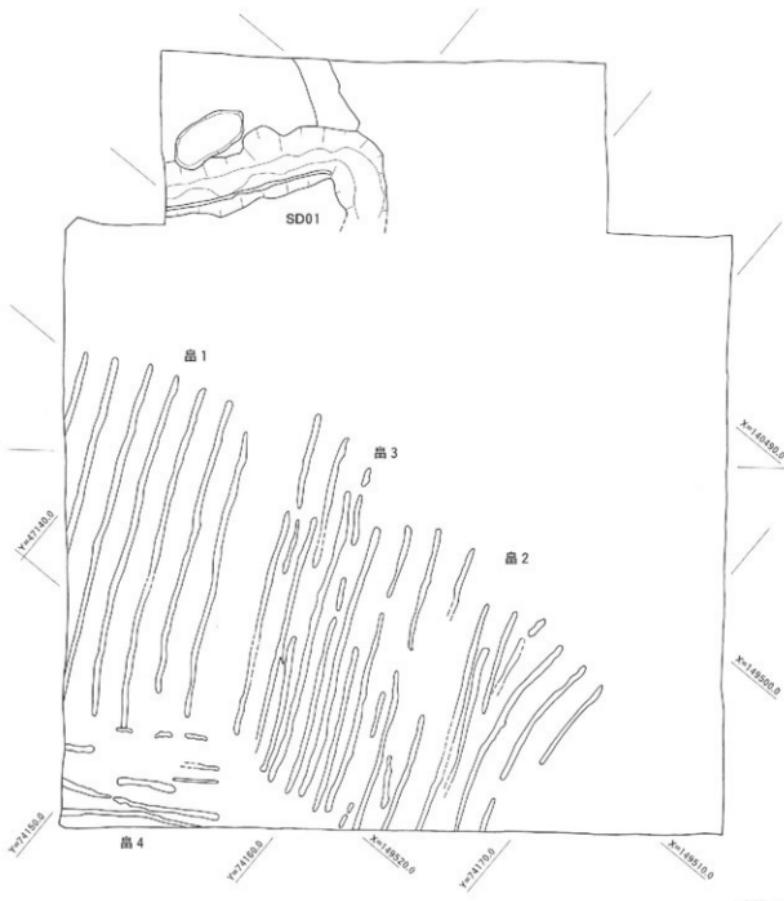
第20図 第3層出土土器

11は、椀の底部片である。底部は回転糸切りにより切り離されている。内面見込み部分は明確に落ち込まない。12世紀前半と考えられる。底径6.0cm。

12は、捏鉢の小片である。口縁端部の形態から、13世紀後半から14世紀にかけてのものと考えられる。

時期

上記の遺物に加えて、図化できなかった遺物等から判断して、当土壤層は12世紀以降に形成されたものと考えられる。



0 10m
 第21図 第1面 弥生時代の遺構

第2節 調査の結果

調査の結果、4面にわたって遺構を検出した。

(1) 第1面

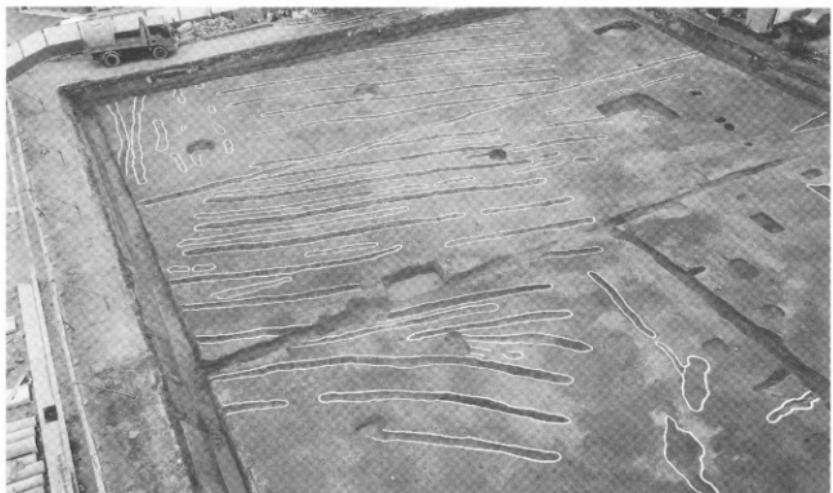
はじめに 第1面では、弥生時代後期から平安時代にかけての遺構を検出している。検出された遺構は、畠・溝・土坑・柱穴がある。



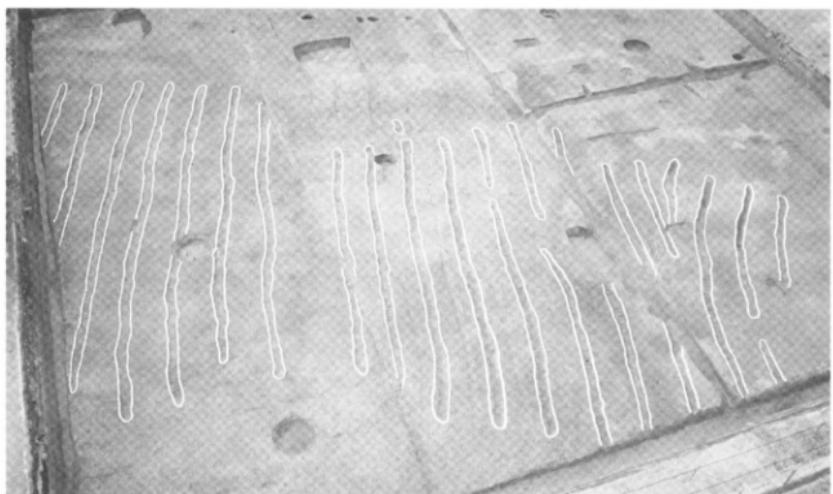
第22図 第1面全景

I. 弥生時代の遺構と遺物

畠と土坑を検出している。畠は4単位（畠1～畠4）検出された。



第23図 畠全景（東から）



第24図 畠全景（南から）

島1

検出状況

調査区西端で検出されており、さらに調査区外へと続く。

規模

6畝からなり、畠幅は平均1.4mを測る。畠溝の幅は検出面で25~30cmを測り、最も長いもので19mを測る。検出面からの深さは20~30cmである。

埋土

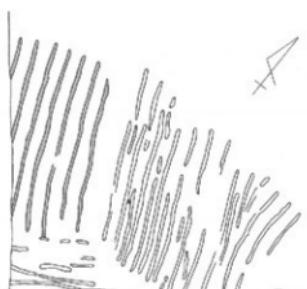
黒褐色シルト質極細砂が堆積していた。

動痕

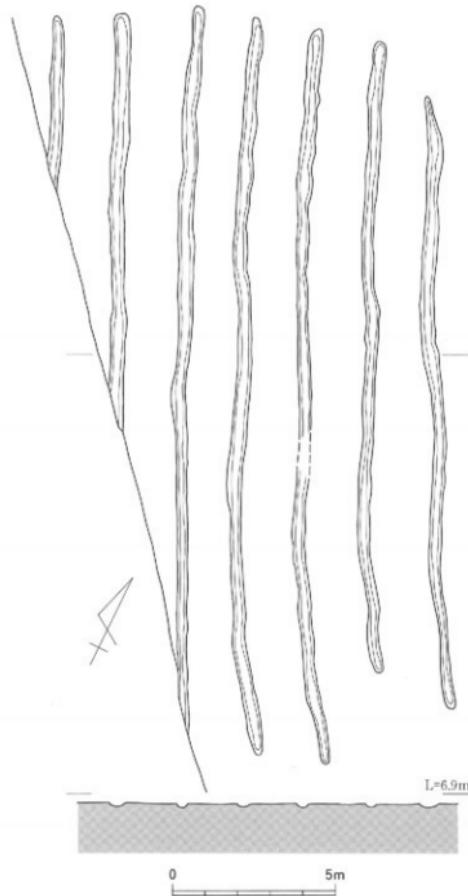
畠溝の埋土をある程度掘り下げていくと、畠溝の主軸方向に直交して幅約15cm、長さ



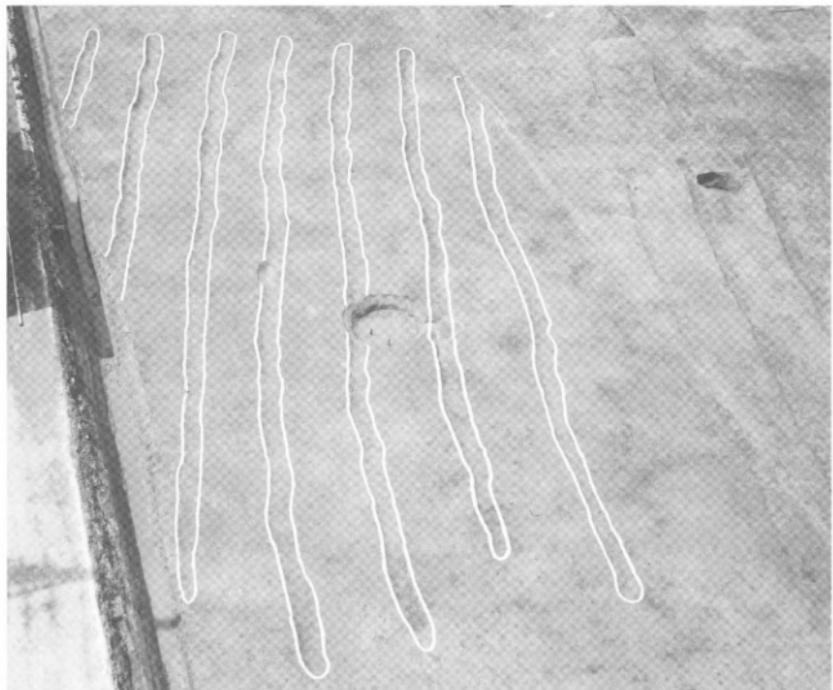
第25図 島1の検出



第26図 島1の位置



第27図 島1



第28図 畠1 全景

20~30cmの長楕円形の埋土の溜まりが一定間隔で検出された。その規模および検出状況から、農耕具による作業の痕跡であると考えられる。具体例では鋤が想定される。

この工具痕は心々距離で狭いところで25cm、広いところでは40cmの間隔で見られ、検出したレベルからさらに5~10cm掘り込まれている。

全く出土していない。

出土遺物



第29図 畠溝断面

島 2

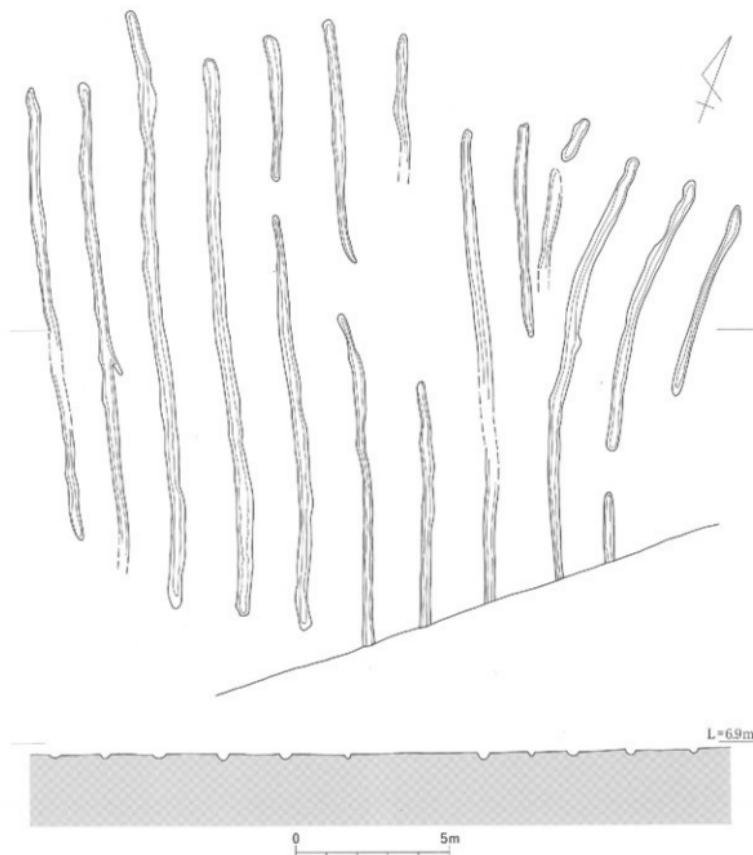
検出状況

調査区の南端で検出された。東の数本の畠溝はさらに調査区外へと続く。今回検出した島の中で、まとまった単位としては最も大きなものである。

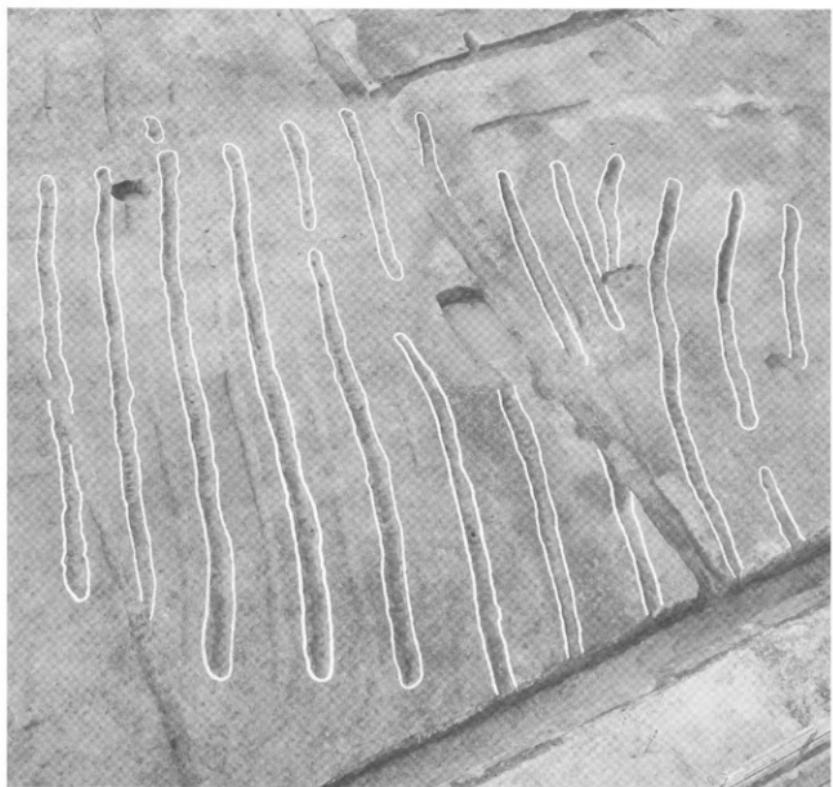
この島全体を見ると、畠幅に一部不規則な部分が見られる。すなわち、西側では、畠溝は直線的にほぼ並行して検出されたが、東端の4条は緩やかに東へカーブしている。直線的に伸びる畠溝と



第30図 島 2 の位置



第31図 島 2



第32図 島 2 全景



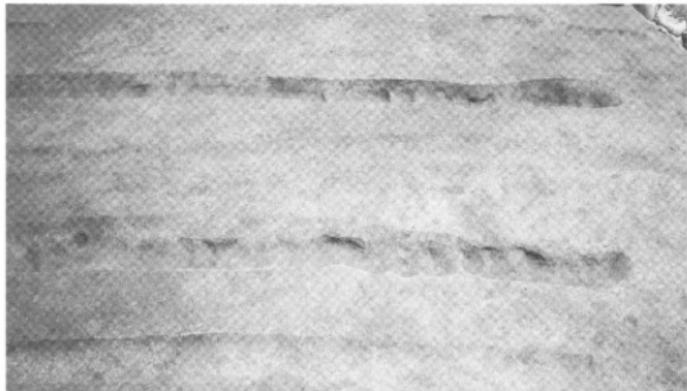
第33図 島 2 の検出



第34図 島 2 誓溝底部

カーブする一群の間は、畠幅が狭くなったり、畠溝同士が一部交接する。しかし、切り合いは見られない上、東側から 4 条目の溝と 6 条目の溝は北側では大きく離れるものの南半では平均的な間隔で並行する。このことから、2 つの畠の単位が重なっているのではなく、微妙な地形の起伏に合わせて畠が作られたためと考えられるのである。

規模	10 畠からなり、畠幅は平均 1.2~1.4m を測る。畠溝の幅は、検出面で 25~30cm を測り、最も長いもので 19m を測る。検出面からの深さは 20~30cm である。
埋土	黒褐色シルト質極細砂が堆積している。
鋤痕	畠 1 と同様、畠溝の底部に鋤痕と考えられる、工具痕が検出された。鋤痕は心々距離で平均 30cm ほどの間隔で見られる。検出したレベルからは、さらに 5~10cm 堀り込まれている。
出土遺物	畠溝の底から弥生土器片が出土している。



第35図 畠2 畠溝



第36図 鋤痕

島 3

検出状況

調査区の南端に位置しており、島 2 と重複して検出された。検出された畝溝のうち東側の数本はさらに調査区外へ続く。

規模

7 畝からなり、畝幅は平均1.4mを測る。島 1・島 2 よりも後世の削平を強く受けている。畝溝は、検出面における幅約20~30cmを測り、最も長いもので19mを測る。検出面からの深さは10cmである。

埋上

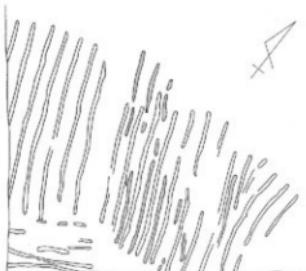
黒褐色シルト質極細砂が堆積している。

鉛痕

他の島と同様、畝溝の底部に鉛痕と考えられる工具痕が検出された。鉛痕は心々距離で平均30cmほどの間隔で見られる。検出したレベルからは、5 cm程度掘り込まれている。

出土遺物

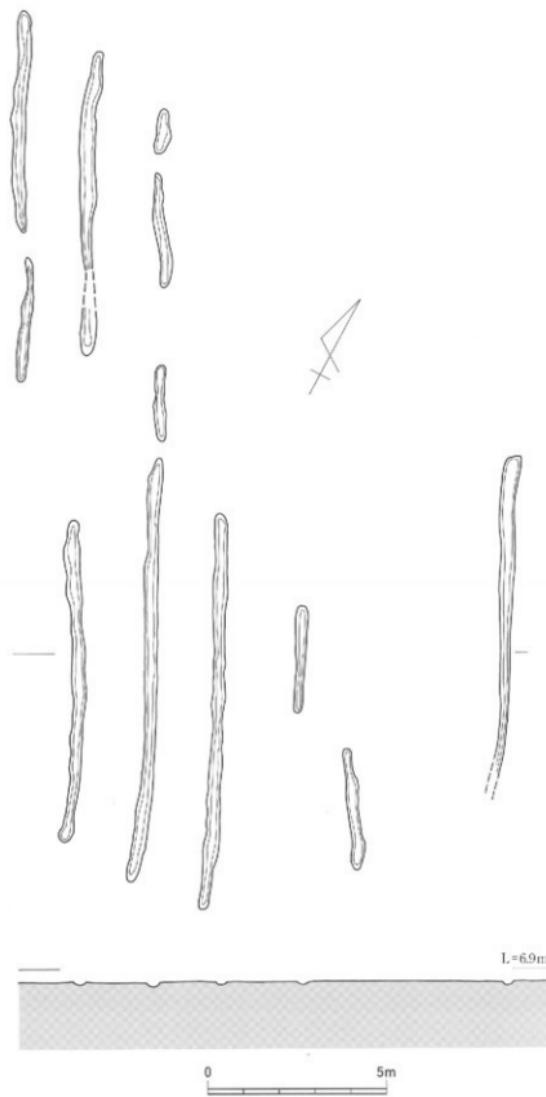
畝溝の底から弥生土器片が出土している。



第37図 島 3 の位置



第38図 島 3 (南から)



第39図 岛 3

島 4

検出状況

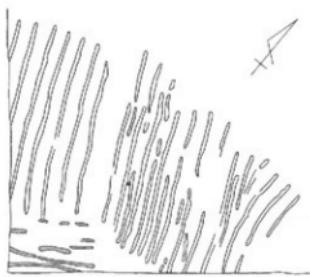
調査区西隅で検出された。畝溝の方向は他の島とほぼ直交する。一部島 1 と切り合っているが、前後関係は明らかにできなかった。また、畝溝の間隔から、島が重複している可能性が考えられるが、検出状況が良好でないため明確にできない。

規模

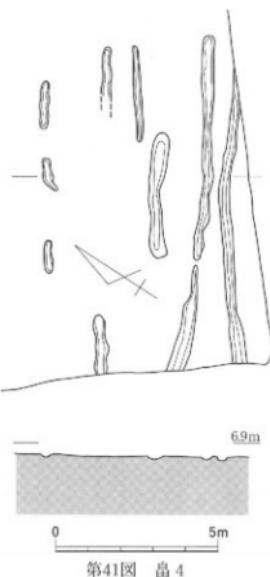
5条の畝溝からなる。畝幅は1.4mを測る。畝溝は、検出面における幅約25~30cmを測り、最も長いもので8.8mを測る。検出面からの深さは10cmである。

出土遺物

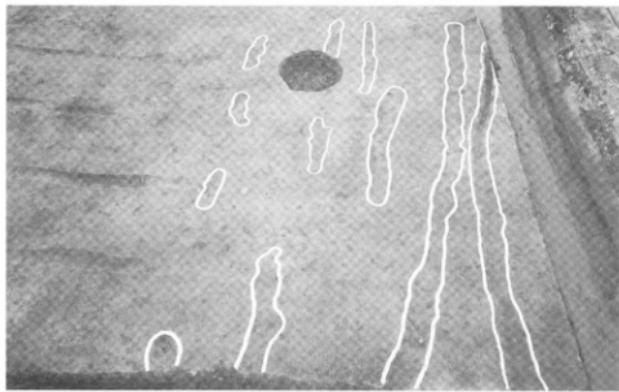
全く出土していない。



第40図 島 4 の位置



第41図 島 4



第42図 島 4 全景（西から）

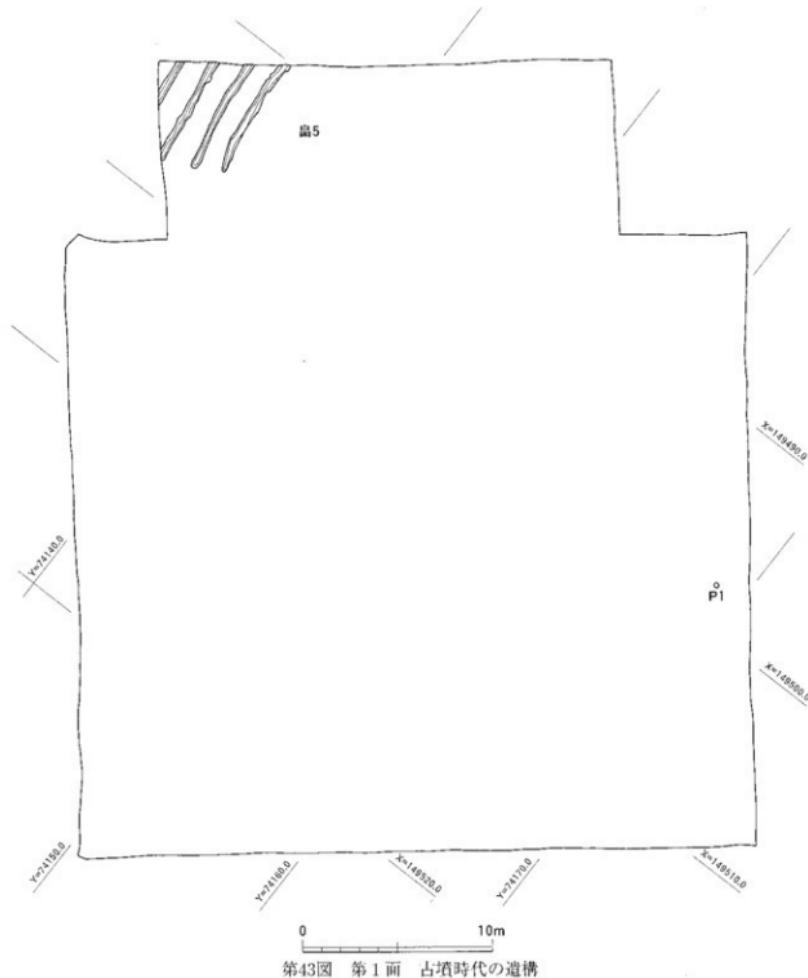
土坑

検出状況

調査区東半部で数基検出した。平面形は不定形をなし、比較的浅く、明確な掘り方は見られないため自然の窪地であった可能性が高い。

II. 古墳時代の遺構

島と柱穴を検出している。島については、前節でも触れたように、第4層下面を基盤とした第1面で検出したものであるが、土層断面の観察によると、畝溝は第4層上面から切り込んでいる。したがって、層位的には島1～4より上面にあたるものである。ただし柱穴については、層位関係は明確にできなかった。



島5

検出状況

調査区北西隅で検出されており、さらに調査区外へと広がる。

規模

4畝からなり、畝幅は第1面で平均1.3~1.4mを測る。畝溝は最も長いもので6.2mを測る。検出面からの深さは35cmである。

鉗痕

畝溝の底には鉗痕が顕著に見られた。鉗痕は心々距離で15~20cmの間隔で見られる。検出したレベルからは、平均10cm程度掘り込まれている。

出土遺物

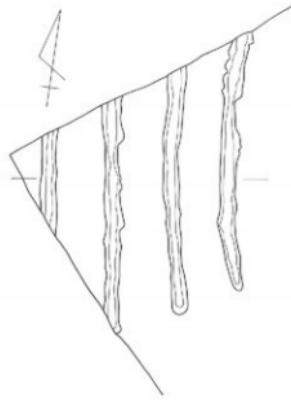
須恵器の坏蓋が出上している(第44図)。



第45図 島5 全景



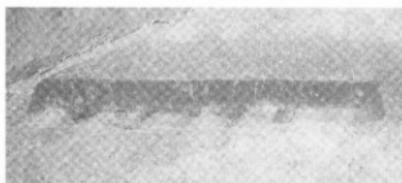
第44図 島5 出土土器



第46図 島5



第47図 島5 の検出



第48図 島5 鉗痕

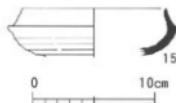
柱穴

規模

第1面ではP1の1穴のみが検出された。調査区東端中央部付近に位置しており、直径20cm、検出面からの深さ8cmを測る。

出土遺物

須恵器の坏身片が出土している(第49図)。島5に伴う土器よりも新しい傾向にある。



第49図 P1 出土土器

III. 奈良時代の遺構

検出した遺構は溝のみである。

SD02

検出状況

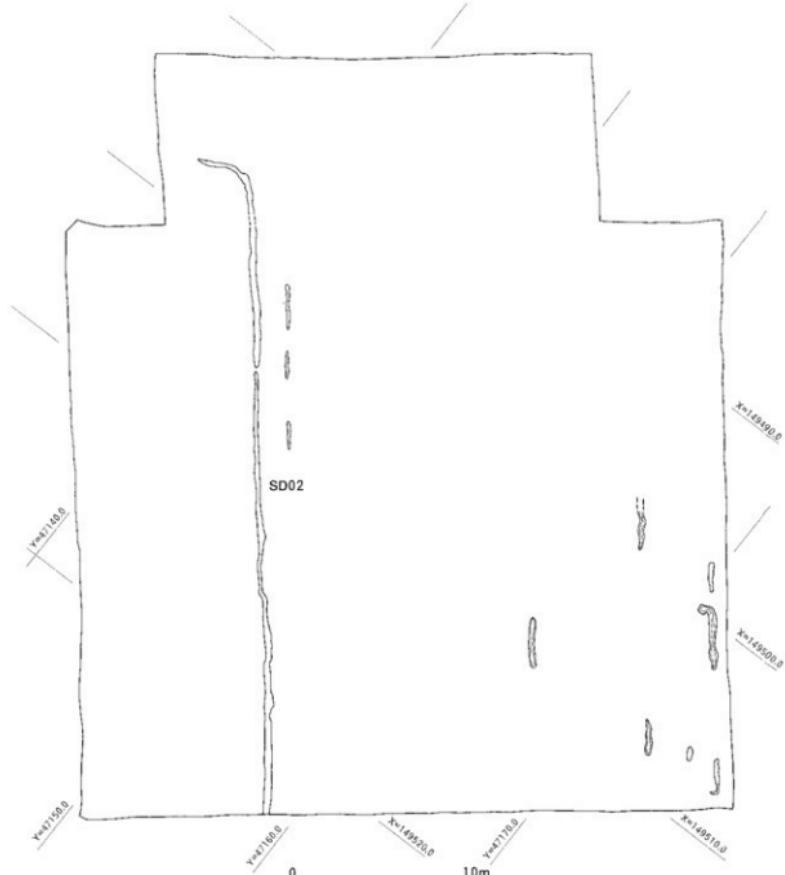
島1・島2の畝溝を切って検出された。南西-北東方向に直線的に延びる。北側で南西から北東方向へほぼ直角に屈曲する。南は調査区外へと延びる。

規模

総延長37.5m、北東方向の直線部分で35mを測る。検出面における幅は40cmである。

出土遺物

固化することはできなかったが、土師器の壺の小片がわずかに出土している。



第50図 第1面 奈良時代の遺構

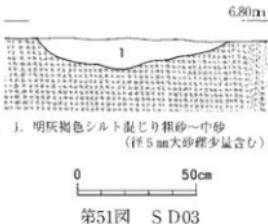
IV. 平安時代の遺構

溝と鰐溝を検出している。

S D 0 3

検出状況

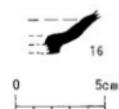
北西-南東方向に直線的に延びる。南東側は調査区外へと延びる。総延長13m、検出面における幅1m、検出面からの深さ15cmを測る。横断面は逆台形で、平底を呈している。埋土は、径3~5mmの大礫が混じる明灰褐色粗砂~中砂が堆積していた。



第51図 S D 03

出土土器

須恵器や土師器が数点出土しているが、いずれも小片である。図化できたのは、須恵器の楕の底部片（第52図 16）のみである。底部は、内面見込みが一段落ち込む。底部は、十分観察できなかったが、糸切りにより切り離されているものと考えられる。



時期

出土した土器から、11世紀後半を中心とした時期と考えられる。

第52図
SD03出土上器

検出状況

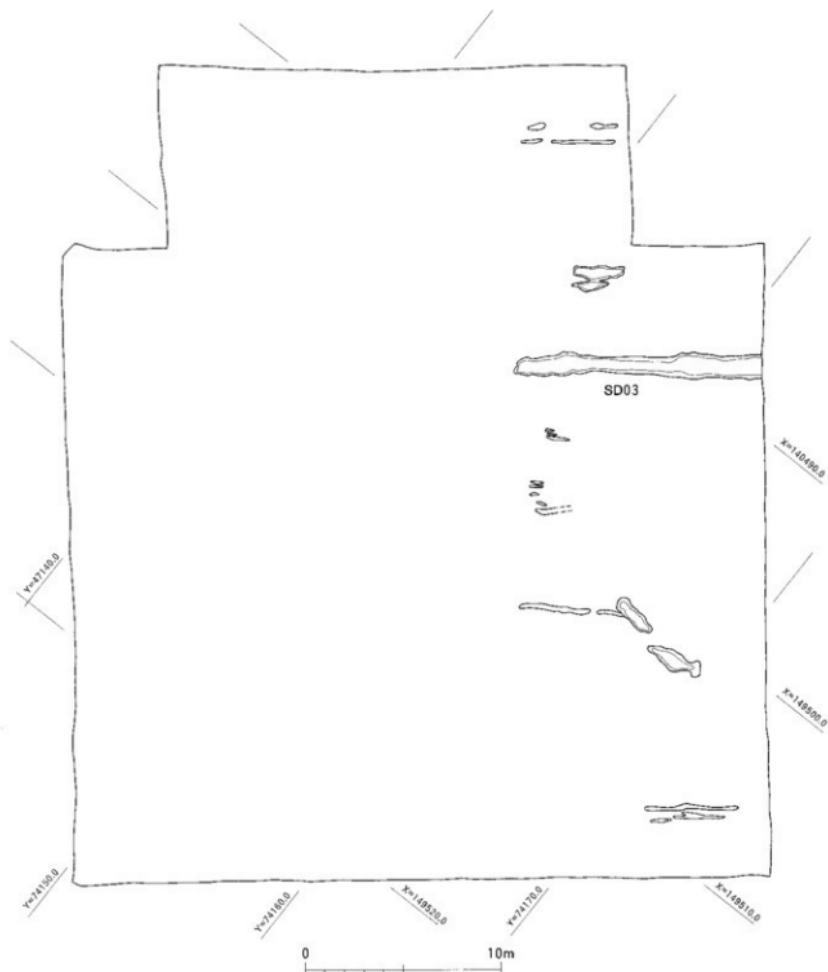
調査区東半部で検出した。

規模

現存長は、遺存状況の良好なもので4.8~5.5m、検出面における幅10~20cmを測る。

時期

出土遺物はないが、SD36と同一方向に延びており、埋土の特徴も酷似していることから、平安時代後期のものと考えられる。



第53図 第1面 平安時代の遺構

(2) 第2面

検出状況

前節でも述べたように、第1面の基盤層である洪水砂層を掘り下げて検出した。検出は東半部に限られる。西半部は河道となっており洪水砂の厚い堆積が認められた。この河道は当初から存在しておらず、土層の堆積状況から、この河道によって水田土壤層が抉り取られていることが理解できる。

水田土壤面

水田土壤面の可能性が高いため調査したが、畔は検出されなかった。

時期

当面を検出するにあたって出土した土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

(3) 第3面

検出状況

第2面の基盤層である土壤層を掘り下げる段階で検出した。第2面と同様、洪水砂により西半部を抉り取られている。

遺構

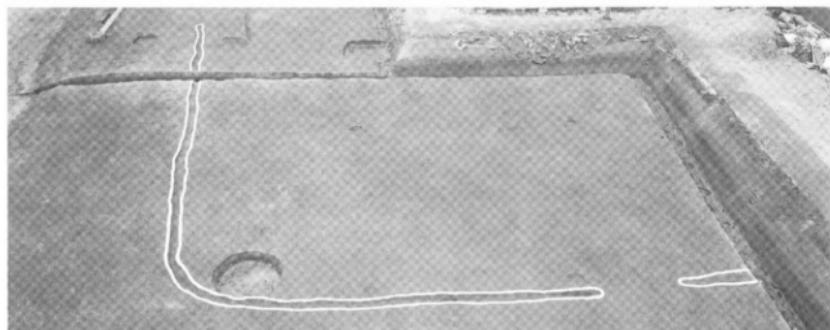
洪水砂を基盤とし、柱穴・掘立柱建物跡や溝などの遺構を検出した。

時期

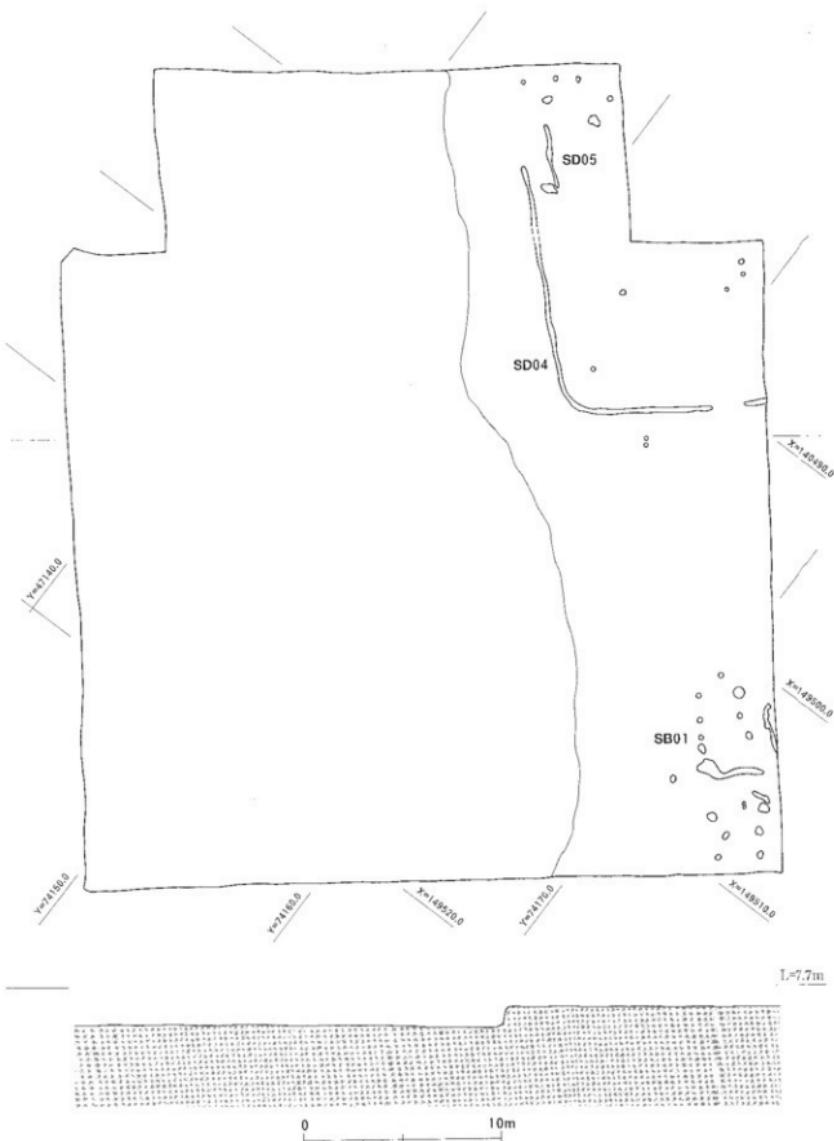
当面を検出するにあたって出土した土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。



第54図 第3面全景（西から）



第55図 S D 0 4



第56図 第3面

S D 0 4

- 検出状況 ほぼ直角に屈曲し、直線的にのびる溝である。方向は北西→南東から屈曲して北東へ延びており、さらに調査区外へ続く。溝の内側では、柱穴を数基検出しているが、建物跡は復元できなかった。何らかの区画溝としての性格を持つものと考えられる。
- 規模 コーナー部分から北西へ13.0m、北東へ10.2mを測る。検出面における幅は15~20cm、検出面からの深さは10cmを測る。
- 出土遺物 墓上中から弥生時代後期と考えられる土器片が出土している。

S D 0 5

- 検出状況 SD04と南東→北西方向に並行する。現存長で34mを測る。遺構の性格は不明である。
- 出土遺物 全く出土していない。

S B 0 1

- 検出状況 梁行1間、桁行2間の楕柱-建物跡である。棟軸方向は、N41°Wを指向する。東桁行は不整である。柱穴間距離はP1-P2間で0.9m、P2-P3間で1.2m、P4-P5間で1.1m、P5-P6間で1.1mを測る。梁行での柱穴間距離は、P1-P6間で2.4m、P2-P5間で2.0m、P3-P4間で1.95mを測る。
- 柱痕 柱痕はP2を除いては検出できなかった。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 柱穴 いくつか検出したが、建物跡などは復元できなかった。
-

(4) 第4面

- 検出状況 第3面の基礎層である洪积砂层を掘り下げて検出した。水田土壤面の可能性が高いため調査した。第2面と同様、洪积砂により西半部を抉り取られている。
- 時期 当面を検出するにあたって出土した土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。
- 検出遺構 水田面を検出した。吐畔は検出できなかった。

第4章 若松町遺跡の自然科学分析

第1節 はじめに

新山雅広・鈴木 茂（パレオ・ラボ）

1. はじめに

若松町遺跡は、長田区若松町11丁目地内に所在する弥生～平安時代の遺構・遺物が検出された遺跡である。調査では、弥生時代後期後半～古墳後期の複数の歓状遺構が検出された（第58図）。

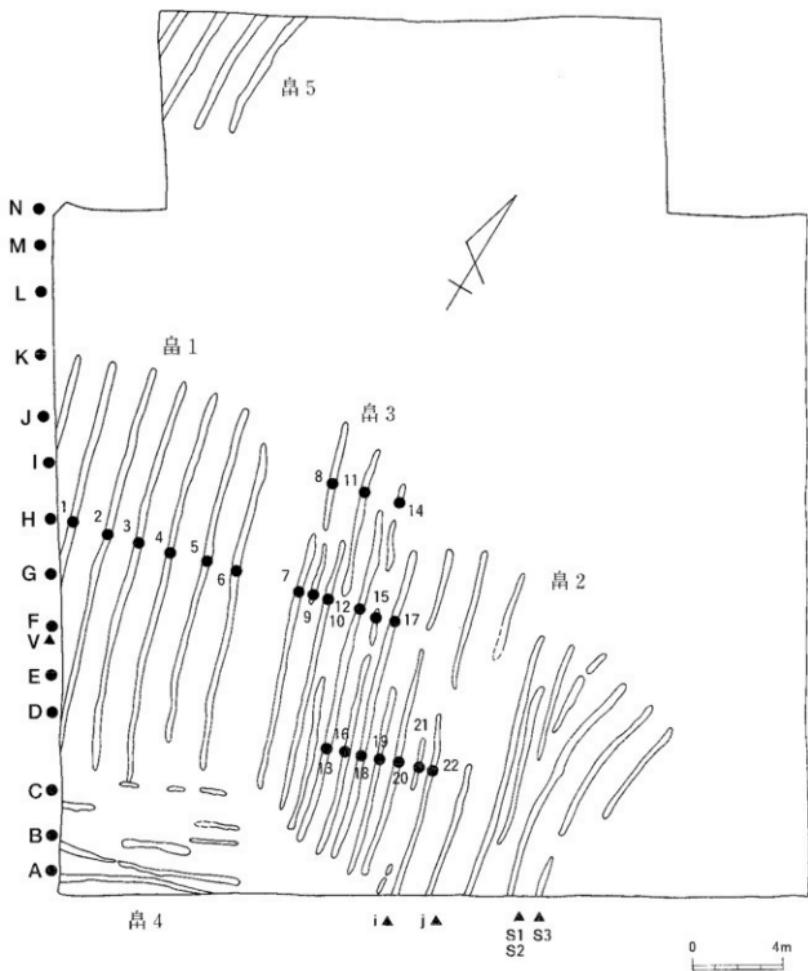
ここでは、これら歓状遺構の利用状況を把握するために、花粉化石、プラント・オバール化石および大型植物遺体を調べた。

2. 試料

分析は、歓状遺構の歓部・溝部および上位・下位層を対象とした（第1表）。花粉化石が溝部・上位層・下位層の14試料、プラント・オバール化石が歓部・溝部の7試料、大型植物遺体が溝部・上位層・下位層の40試料である。

第1表 分析資料一覧表

遺 構	位 置	試 料		
嵐 1	歓 部	花粉化石 D, G, I	プラント・オバール化石 D, G, V	大型植物遺体 D～N
	溝 部			1～6
嵐 2	歓 部		i, j	
	溝 部	13, 16N, 16S, 18～22, S3	22, S3	7, 9, 10, 12, 13, 15～22, S3
嵐 3	歓 部			
	溝 部			8, 11, 14
嵐 4	歓 部			
	溝 部			A, B, C
中世水田	耕作上	S1		S1
歓状遺構下位層	耕作上？	S2		S2



第58図 分析試料採取位置平面図

第2節 若松町遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

若松町遺跡は、神戸市長田区若松町11丁目に所在する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、弥生時代の畠、古墳時代の柱穴および平安時代の溝といった遺構が確認されている。ここでは、弥生時代の畠の栽培作物を明らかにする手掛かりを得る目的で花粉化石群集の検討を行った。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、畠遺構の溝内試料の13、16N（16北）、16S（16南）、18、19、20、21、22、S3、耕作土相当層のD、G、I、およびS1（畠遺構の上層、中世の水田層）、S2（畠遺構の下層）の合計14試料について行った。各試料は、おむね黒褐色～暗灰黄色の砂質シルト～シルトである。なお、これら検討した試料は全て、大型植物化石の検討にも用いられた。

花粉化石の抽出は、試料約2～5gを10%水酸化ナトリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塙鉱物などの溶解、アセトシリス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・科学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロビペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 結果および若干の考察

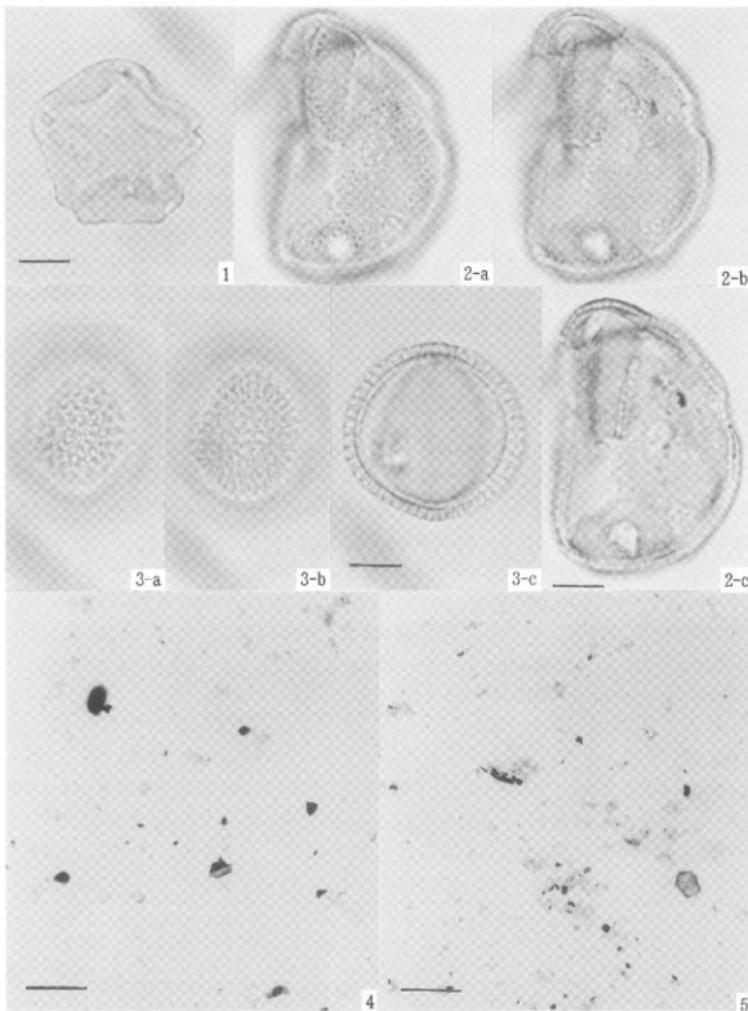
検討した試料はいずれも、十分な花粉化石を含んでおらず、まれに产出する花粉化石の保存状態は非常に悪いもののが多かった。産出した花粉化石群集の主な特徴は、樹木では、ハンノキ属が大半の試料から産出していること、また、絶滅種のフウ属が数試料から産出していることである。このフウ属は、第三紀末から第四紀初め頃に絶滅した分類群であるが、検討した試料は、出土遺物から弥生時代の終わり頃と考えられており、二次的に堆積したものと考えられる。これには、保存状態の非常に悪かった一部のハンノキ属、ヨモギ属なども含まれている可能性がある。一方、草木の主な特徴は、アブラナ科が数試料から産出し、試料20、Dでは、花粉・胞子総数の半程度とやや目立った产出をしたことである。このアブラナ科が畠で栽培されていたのかは明らかではないが、畠付近に生育していたことは間違いないであろう。他に、試料18ではガマ属が产出し、付近に水位の低い湿地ないし水溜まりのような環境が存在していたことが予想される。

参考文献

神戸市教育委員会（1998）若松町遺跡現地説明会資料

第2表 花粉化石-観長

和名	学名	13	16N	16S	18	19	20	21	22	D	G	I	S1	S2	S3
樹木 ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 楔葉管束電属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	5	-	2	-	3	4	5	9	8	-	-	1	7	5
ニレ属—ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ属	<i>Liquidamber</i>	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	2	-
クロウメモドキ科	<i>Rhamnaceae</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本 ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	-	-	1	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-	2
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	-	1	-	-	8	-	2	11	-	-	1	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	-	1	-	2	1	-	2	-	3	2	-	1	2
タンボボ科	<i>Liguliflorae</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
シダ植物 单条型胞子	<i>Monolete spore</i>	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	1
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	6	1	3	1	5	4	6	9	10	0	1	1	11	5
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	0	0	3	1	3	10	1	6	11	3	2	2	1	5
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	1
花粉・胞子總數	<i>Total Pollen & Spores</i>	6	2	6	2	8	15	7	15	21	3	3	3	17	11
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	1	1	4	4	6	7	4	11	12	0	0	2	21	10



1 : ハンノキ属、試料 20、PAL. MN 1263 4 : プレパラート状況、試料 S1

2 : フウ属、試料 S2、PAL. MN 1265

3 : アブラナ科、試料 20、PAL. MN 1264

5 : プレパラート状況、試料 I

第59図 産出した花粉化石 (scale bar 1~3 : 10 μ m 4, 5 : 100 μ m)

第3節 プラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や單細胞珪酸体などの植物遺体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となつたものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稻作の有無についての検討も行われている（藤原、1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稻作の検討が各地、各遺跡で行われている。若松町遺跡においては、中世の水田遺構直下に島とみられる弥生時代の畝状造構が検出され、この畠作遺構の作物について検討する目的でプラント・オパール分析を試みた。

1. 試料と分析方法

分析用試料は畝状造構の歯部より採取されたD、G、i、j、Vの5試料と、凹部のS3と22の総計7試料である。そのうち歯部試料はおむね黒褐色～暗褐色の粘土混じり砂で、赤褐色酸化鉄の集積が認められる。凹部のS3は黒色の砂質粘土でレキが散在し、22は黒色の粘土混じり砂レキである。プラント・オパール分析はこれら7試料について以下のような手順にしたがって行った。

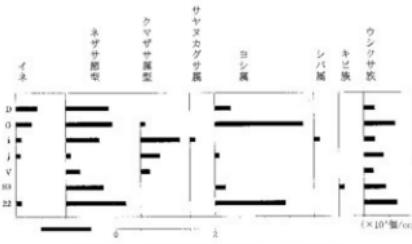
秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピース（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱水処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピースが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各プラント・オパール個数を求め（第3表）、それらの分布を第60図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当たりの検出個数である。

第3表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料 番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	サヤスカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
D	4,300	8,600	0	0	3,200	0	0	2,200	8,600
G	3,100	9,400	1,000	0	17,800	0	0	6,300	10,500
i	1,100	6,800	7,900	1,100	0	1,100	0	2,300	5,600
j	1,000	1,000	4,000	0	1,000	0	0	4,000	2,000
V	0	2,800	1,900	0	0	0	0	1,900	900
S 3	0	7,500	0	0	2,200	0	1,100	4,300	10,800
2 2	1,100	12,000	0	0	14,200	0	0	6,600	12,000



第60図 プラント・オバール分布図

検鏡の結果、VおよびS3の2試料を除く5試料よりイネのプラント・オバールが検出された。最も多く検出されたのはDの4300個、次いでGの3100個で、他は1000個ほどである。

最も高い検出個数を示している分類群はネザサ節型で、多くが10,000個前後である。ヨシ属は試料による検出数に大きな違いがみられ、Gでは約18,000個、試料22では14,000個と10,000個を越え、ヨシ属としては非常に多く検出されている。ウシクサ族は全試料から得られ、検出個数は4000個前後を示している。その他、クマザサ属型、シバ属、キビ族などが検出されている。

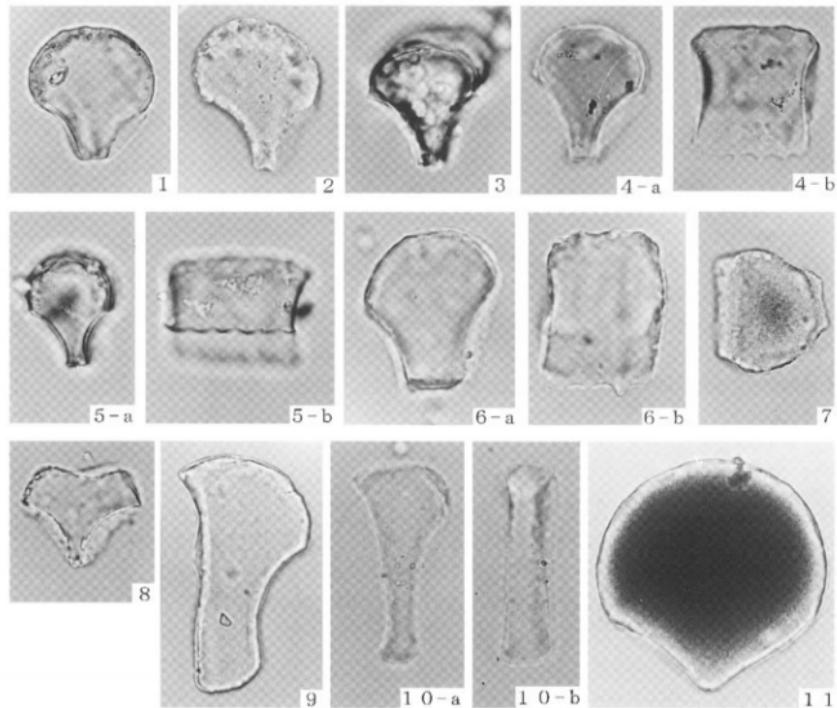
3. 稲作物について

上記したように、VおよびS3の2試料を除く5試料よりイネのプラント・オバールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オバールが試料1gあたり5,000以上という高密度で検出された地點から推定される水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原、1984）。こうしたことから、稲作の検証としての5,000個を目安に、プラント・オバールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。若松町遺跡では5,000個を越える試料は無く、D、Gにこれに近い数値が示されているものの上記に従えば稲作の可能性は低いと判断される。なお、下位層には、弥生の水田耕作土が挟在することから、これら水田耕作土の一部が歎状遺構の耕作上を構成することが予想されるためプラント・オバール化石が検出されるものと考えられる。

キビ族がわずかに検出されている。キビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものか現時点においては分類できず不明である。しかしながら、1試料のみからの検出であり、検出個数もわずかであることからキビ族の栽培についての可能性は非常に低いと推察されよう。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学, 9,p.15-29.
- 藤原宏志（1984）プラント・オバール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－、考古学ジャーナル, 227,p.2-7
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オバール分析の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－、考古学と自然科学, 11,p.9-20.



1～5：イネ（1～3, 4-a, 5-a：断面、4-b, 5-b：側面）

1：試料 D, 2：試料 G, 3：試料 i, 4：試料 j, 5：試料 v

6：ネザサ節型（a：断面、b：側面） 試料 22

7：クマザサ属型（断面） 試料 G

8：シバ属（断面） 試料 i

9、10：ウシクサ族（9、10-a：断面、10-b：側面）

9：試料 D, 10：試料 v

11：ヨシ属（断面） 試料 22

第61図 若松町遺跡のプラント・オバール (scale bar : 30μm)

第4節 若松町遺跡の大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

若松町遺跡は、神戸市长田区若松町11丁目に所在する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、弥生時代の畠、古墳時代の柱穴および平安時代の溝といった遺構が確認されている。ここでは、弥生時代の畠の栽培作物を明らかにする手掛かりを得る目的で大型植物化石の検討を行った。

2. 試料と方法

大型植物化石の検討は、畠遺構の溝内試料である。1～22、S3の24試料（16は16北と16南の2試料）、耕作土相当層であるA～Nの14試料およびS1（畠遺構の上層、中世の水田層）、S2（畠遺構の下層）の2試料の合計40試料について行った。各試料は、おむね黒褐色～暗灰黄色の砂質シルト～シルトである。

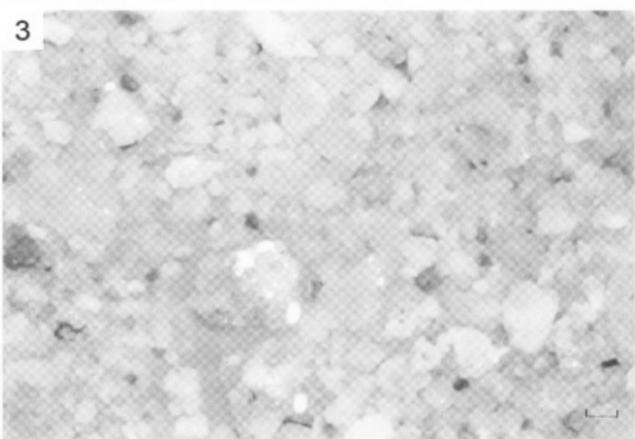
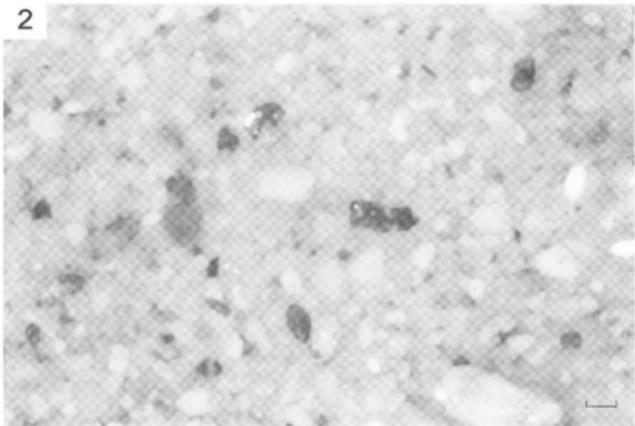
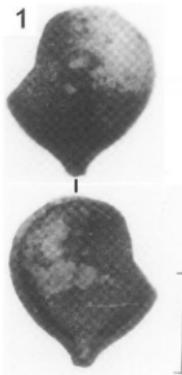
大型植物化石の採集は、試料約100～300ccを0.25mm目の網を用いて水洗筛い分けを行い、実体顕微鏡下で残渣中から拾い上げた。

3. 結果および若干の考察

検討した40試料はいずれも植物遺体が非常に乏しく、残渣はほぼ砂砾のみであった。大型植物化石を含んでいたのは、試料Kのみであり、炭化したタデ属の果実（破片）が1点含まれていた。このタデ属の果実は、二面の倒卵形で長さ約1.6mm、幅約1.3mmであった。これは、畠で栽培されていた可能性もあるが、雑草として生育していたことなども考えられる。

参考文献

神戸市教育委員会（1998）若松町遺跡現地説明会資料、5p.



1. タデ属、炭化果実、試料 K 2. 試料 22 の残渣の状況 3. 試料 K の残渣の状況

第62図 出土した大型植物化石（スケールは 1 mm）

第5章 まとめ

第1節 島について

(1) 時期について

はじめに

第3章でも触れたが、改めて各島の時期について検討しておきたい。ここでは第1次調査の結果に基づくものと、第2次調査の成果との照合の2方向から検討する。

第1次調査

調査では島1～島5の5区画の島状造構を検出している。ここでは、島1～島4と島5にわけて時期を検討する。

島1～島4

以下の3点を根拠に弥生時代後期～古墳時代初頭に位置付けられる。

- ①島1～島3に伴う畝溝、厳密には畝溝・畝を含む島土壤層（第5層－第14図）を覆う第4層から土器がわずかに出土している。これらの土器の示す時期は、いざれも弥生時代後期である。
- ②島土壤と同時期に堆積したと考えられる第6・10層中から出土した土器から当該層の堆積は弥生時代後期以降と考えられる（第3章第1節）。
- ③第4層が認められない箇所（第6層上面）で土器（第16図－1）が1点出土している。この出土地点は、調査区中央部や北西側の谷部にあたる（第63図）。これは、SD01の延長上にあたる。したがって、土器の取り上げ時には遺構に伴うものとは認識できなかったが、結果的にこの土器もSD01に伴う可能性が高い。この溝の埋土は第4層と同質・同色で、調査では両者の前後関係は明確にできなかったが、第4層と同時期かより新しい時期の可能性が高い。よって、島土壤はこれより下層にあたることから、島1～島4の下限を古墳時代初頭に位置付けることができる。

島5

以下の2点から、古墳時代前期から古墳時代後期にかけての時期が考えられる。

- ①島5の畝溝内から占墳時代後期（6世紀前半）の須恵器片（第44図）が出土しており、他の時期の土器は混入していない。
- ②島5の東側に部分的に第4層が認められない箇所がある。この部分でわずかに第4層の下層にあたる洪水砂の堆積（第13図第5層上面）が認められ、この洪水砂上面から弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての土器（第16図）が出土している。

第2次調査

第1次調査と同様の島状造構が検出されている。層位的・レベル的にみて第1次調査で検出した島と一連のものと考えられる。ただし、同一面で布留式期の住居跡を検出していることから、当該期まで下がる可能性が考えられる。

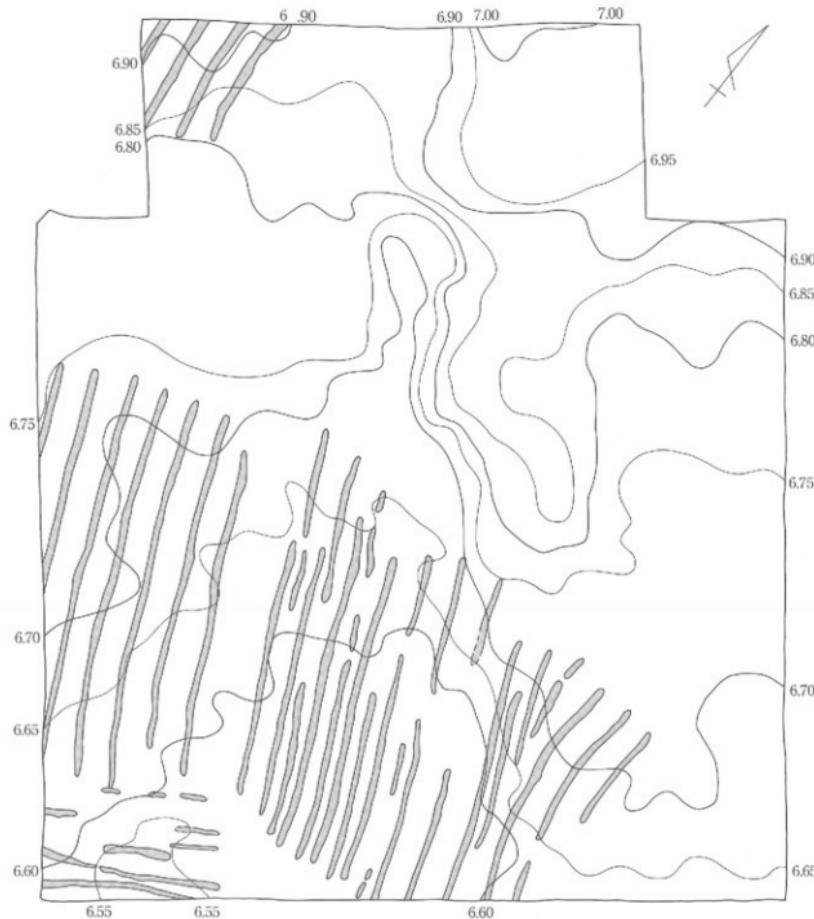
小結

以上から、島1～島4については、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて、島5については、古墳時代初頭から古墳時代後期にかけての時期に位置付けることができる。ただし、島1～島4相互の時期的な前後関係等については明確に得ない。

なお、第1次調査の島1～島4と第2次調査で検出した島の時期の判断が若干異なる点については、土器の出土状況の差に起因する可能性も考えられる。つまり、島1～島

4に伴う土器がわずかであり、しかも第V様式系甕のみである。この第V様式系甕については、布留式土器との共伴例が少なくないことから、畠1～畠4で出土した第V様式系甕は当該期まで下がる時期のものである可能性も考えられる。

したがって、第1次調査と第2次調査が連続した調査区ではないことを考慮に入れ、畠1～畠4の時期を先述した弥生時代後期後半から古墳時代初頭とやや時期幅をもたせておきたい。



第63図 第1面微地形の復原

(2) 岌の特徴

はじめに

本項では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けられた島1～島4を中心にしてまとめていくこととする。

立地

第1章で報告したように、微高地に立地している。さらに、島遺構を検出した第1面の微地形を復原したのが第63図である。これによると、島5をのぞいて、わずかに谷状を呈する箇所に畝立てがなされている。また、畝溝と微地形の関係をみると、おおまかに傾向として、畝溝は等高線に対して斜行する傾向にある。

なお、島2の南東側の4条の畝溝の方向が他の畝溝と異なる点について、微地形との明確な関係を捉えることは困難である。

第4表 岌一覧表

	畝幅(m)	畝長(m)	畝高(cm)	畝数(畝)	面積(m ²)	時期
島 1	1.40	19.0	20~30	6	237+a	弥生時代後期後半~古墳時代初頭
島 2	1.2~1.4	19.0	20~30	10	418	弥生時代後期後半~古墳時代初頭
島 3	1.40	19.0	20~30	7	275+a	弥生時代後期後半~古墳時代初頭
島 4	1.40	8.8		10	52+a	弥生時代後期後半~古墳時代初頭
島 5	1.3~1.4	6.2	35	4	37+a	古墳時代後期

規模

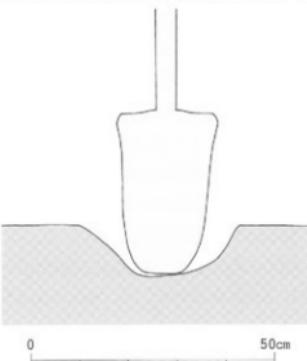
島1～島5の規模をまとめたのが第4表である。島1～島5とも、調査区外まで広がっているため、規模等を明確にすることは困難である。このなかで、島1～島3の最も長い畝溝の長さははいざれも19mと共通している。また、島の面積であるが、上記の理由から明確に計測できるものはない。このなかで、島2については、418m²と推定することができる。

鋤痕

当遺跡の島の特徴の一つとして、鋤痕が顯著に認められた点が指摘できる。鋤痕の規模は第3章で報告したとおりである。

鋤痕の規模

ここでは、鋤で掘り起こしたと考えられる痕(鋤痕)と実際に出土した鋤そのものの規模を比較してみたい。比較対象とするのは、弥生時代中期と時期は若干異なるが玉津田中遺跡出土例である。これによると、畝溝の幅と鋤幅を比較すると(第64図)、鋤幅に対して畝溝の幅の方が広い傾向にある。実際に掘り起こす状況を考慮に入れると、両者間に大きな矛盾はないも



第64図 鋤痕の規模

のと考えられる。

栽培作物

畠土壤層を中心に花粉化石、プラント・オパール、大型植物化石の分析等を実施した（第4章）が、耕作物を特定することはできなかった。この理由の一つとして、畠作を数期しか行わない段階で地形環境の変化に伴い畠作を放棄したことも考えられるが、第3章の基本土層の観察からは、積極的に言及することは困難である。

花粉化石の分析ではアブラナ科が产出され、プラント・オパールではキビ族がわずかに検出され、大型植物化石の分析ではタデ属の果実が1点検出されている点などに、わずかながら畠作の可能性を見いだすことができる。

（3）まとめ

自然科学分析の結果、今回の調査で検出した造構を畠と断定することはできない。しかし、畠の可能性が極めて高いものと考えている。したがって、報告では「畠」と記述してきたが、現状では畠状造構と呼称するのが最も妥当と考えられる。

ところで、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けられる畠は、周世入相遺跡⁽¹⁾（兵庫県赤穂市）や加美遺跡⁽²⁾（大阪市平野区）など兵庫県下はもより周辺地域においても数例認められる程度である。

弥生時代の農業生産については、検出される造構のほとんどが水田造構であることから、稻作中心に考えられる傾向にあった。しかし、弥生時代の農業生産あるいは食生活を充明していく上で、畠作物は欠かせないものである。このことからも、今後、畠作の実態を充明していくうえでの貴重な資料となりえるものと考えられる。

〔参考文献〕

- （1）甲斐昭光『周世入相遺跡』兵庫県教育委員会 1990
- （2）大庭重信「加美遺跡の発掘調査－KM95-14次－」[大阪府下埋蔵文化財研究会（第35回）資料] 1997
財團法人 大阪市文化財協会「発掘された加美遺跡 大阪市の考古学 展示解説No14」

第2節 地形環境の変化と土地利用

はじめに

調査では4面にわたって平面的な調査を実施した。この結果、土層断面の観察及びプラント・オパール分析の結果を合わせて、地形環境の変化とこれに対応した土地利用の変化を捉えることができた。ここでは、その結果をまとめ、本報告のまとめにかえたい。なお、ここでまとめる事項は、第1次調査に限定されるものである。

地形環境の変化

12段階に分けることができた。以下、各ステージごとに地形環境と土地利用の変化をまとめていく。

第1ステージ

当遺跡の北西側（山側）を流れる妙法寺川によって形成された扇状地と南東側（海側）の砂堆に挟まれた後背湿地であった。弥生時代後期以前。

第2ステージ

妙法寺川の氾濫に伴う洪水により、後背湿地が徐々に埋没する。この過程で、水田として利用されるようになる（第4面）。弥生時代後期。

第3ステージ

妙法寺川の氾濫に伴う洪水により、水田面（第4面）が埋没する。弥生時代後期。

第4・5ステージ

第4面を覆う洪水砂を基盤として、掘立柱建物跡・溝などに代表される居住域となる（第3面）。弥生時代後期。

第3面の上層にあたる洪水砂上面を水田として利用する（第2面）。弥生時代後期。

なお、第3面と第4面の前後関係を明確にすることはできない。これは、第3章でも述べたように、第2面の基盤となる7層と第3面の基盤となる8層とは、同一堆積によることに起因する。

第6ステージ

妙法寺川の氾濫に伴う洪水により調査区西半部の第2面と第4面に対応する水田土壌層が抉り取られる。同時に東半部の水田面（第2面）も埋没する。この段階で、後背湿地

第5表 地形環境の変化と土地利用

	造構面	時 期	地形環境の変化	土地利用
第1ステージ		弥生時代後期以前	後背湿地	
第2ステージ	第4面	弥生時代後期	洪水に伴う後背湿地の埋没化	水田
第3ステージ			洪水に伴う後背湿地の埋没化	水田の埋没
第4ステージ	第3面			居住域
第5ステージ	第2面			水田
第6ステージ			洪水に伴う後背湿地の埋没	居住域・水田の埋没
第7ステージ	第1面	弥生時代末～古墳時代初頭		畠地化
第8ステージ	第1面	古墳時代後期		居住域化
第9ステージ		古墳時代後期～奈良時代	湿地化	
第10ステージ	第1面	奈良時代		水田化
第11ステージ	第1面	平安時代		水田化
第12ステージ		昭和3年以降		市街地化

- 地がほぼ埋没する。弥生時代後期。
- 第7ステージ 第6ステージで堆積した洪水層上面を畠として利用するようになる（第1面）。弥生時代後期後半～古墳時代初頭。
- 第8ステージ 第7ステージと同じ基盤で、北西部では畠として利用するようになる（第1面）。一方、柱穴に代表されるように、東側では付近に集落が形跡されたものと考えられる。古墳時代前期～後期
- 第9ステージ わずかに湿地化し、シルトを主体とした土壤層が形成される。古墳時代後期～奈良時代。
- 第10ステージ 第9ステージで形成された土壤層を水田土壤として利用する（第1面）。これに拘束し、小規模な溝も掘削される（SD02）。ただし、両層の前後関係は明確にできない。奈良時代。
- 第11ステージ 第10ステージとほぼ同一面で、溝・土坑などが掘削される（第1面）。以後、昭和初期まで水田として利用される。平安時代以降。
- 第12ステージ 昭和3年以降、市街地化。

報告書抄録

ふりがな	わかまつちょういせき						
書名	若松町遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山田清朝・高木芳史						
編集機関	神戸市教育委員会文化財課						
所在地	〒650-0001 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL. 078-322-5799						
発行年月日	西暦2000(平成12)年3月31日						
所取遺跡名	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
若松町	神戸市長田区	28110	28	34度 38分 57秒	135度 8分 35秒	1998年 5月11日 7月10日	1380m ² 共同住宅建設
	若松町11丁目						
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
若松町	集落跡	弥生後期 ～	島1区画 水田土壤層	土器			
	生産跡	古墳前期	掘立柱建物跡・溝				
		古墳前期 ～	島1区画 柱穴	土器			
		古墳後期					
	平安時代	溝	土器				

神戸市長田区 若松町遺跡

2000年3月31日 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL (078)332-5798

印 刷 共栄印刷株式会社
神戸市中央区花隈町22-6
TEL (078)341-0316

広報印刷物登録・平成11年度 268号 (A-1類)